

患者と家族が  
よりよい治療とケアを受けるための情報誌

2002

9

MATT 9月号別冊

# がん治療最前線

特集

## 活かすがん免疫&漢方療法 健康食品特集第2弾

- 三浦捷一医師の「がんと闘う」の記 ●だれにでもわかるがん基礎講座「放射線治療」
- エミコ・シール「がんという『サイドトリップ』を楽しんでいます」





「漢方医学でのEBMにはまだ課題がたくさんありますが、かなりレベルアップされてきています」と語る東京大学大学院生体防御機能学講座の趙重文医師

# がん治療における漢方薬の役割とは？

漢方単独での抗がん効果よりも、治療をまっとうする補助の役割を担う

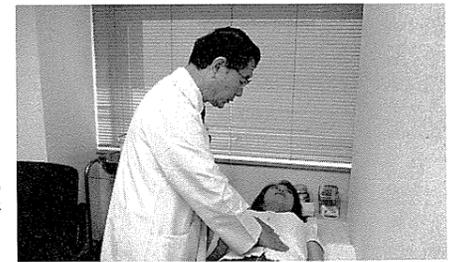
取材・文・菊池憲一 フリーライター  
撮影・塚原明生

再発予防のために、漢方薬と関心を持ち、実際に服用中のがん患者も数多い。漢方医学は西洋医学とはかなり違った点がある。漢方医学にはどんな特長があるのか。がん治療にどんな役割を果たせるのか。そして、漢方薬はどこまで科学的に解明されているのか。漢方医学に詳しい2人の医師に聞いてみた。



強しに来るぐらいいです」(慶應義塾大学医学部東洋医学講座・渡辺賢治助教)

現在、日本では70パーセント以上の医師が漢方薬を用いて日常の診療を行っている。しかし、漢方医学の理念、望診(舌診を含む)、問診(脈診と腹診)という漢方の診察法に基づいて漢方薬を処方する医師は残念ながらまだ数少ない。



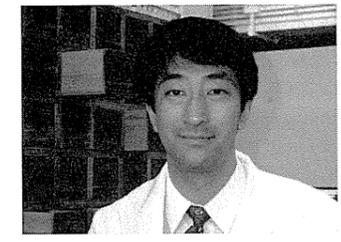
日本の漢方特有の腹診(撮影協力・日中友好会館クリニック所長 関直樹医師)



舌診を含む望診

## 西洋医学・東洋医学の視点を同時に持つ日本での漢方治療

「漢方」という言葉は蘭方(オランダ医学)と区別する必要性から江戸時代に命名された。漢は中国、方は処方とか治療方という意味で、漢方は中国に起源をもつ。しかし、日本では16世紀以降、独自の発達をした。日本漢方の診察法、処方の仕方、薬の出し方などは中国、台湾、香港、韓国のそれとは大きく異なる。



「西洋医学の治療効果を弱めず、副作用だけを取るところに漢方の良さがあります」と語る慶應義塾大学医学部東洋医学講座・渡辺賢治助教

「日本漢方の特長の第一は、西洋医学の教育を受けて医師国家試験に合格した者だけが漢方の処方権を有することです。他の

国では漢方を処方できる医師(中醫師、韓醫師)と西洋医学の医師とは免許が異なるため、一人の患者さんを東洋医学的、西洋医学的な視点を同時に持つ診察することができません。もうひとつの特徴は「腹診」をすることです。腹壁上に現れた特徴をパターンとして認識し、それによって漢方薬を決めます。これはアジアの他の国には見られません。現在では中国、韓国から日本のすぐれた腹診法を勉

## 「得意分野を活かしてがん治療を補助する」

ところで、漢方医学も西洋医学も得意、不得意の分野がある。

渡辺助教は、長年の臨床経験を通して、漢方医学が得意とする分野は①アトピー、喘息などのアレルギー疾患、②婦人科疾患、③がんの緩和ケアを含む慢性疾患のQOL改善の3つを上げ、逆に、不得意分野は①手術を要する疾患、②感染症、③救急救命を要する疾患で、これらは西洋医学が得意とする分野である。

大切なことは、一人の個としての患者に対し、どの治療が良いかを的確に判断し、また組み

合わせることでありと強調する。たとえば、糖尿病であれば血糖を下げるには西洋薬を用い、合併症を予防するためには漢方薬を併用する、などである。

「現在、がん治療には表のような漢方薬が用いられています。症例報告や小規模の臨床研究は多々ありますが、がんの再発・転移予防や長期予後に関するデータも少なく、今後の課題です。しかし、動物実験での基礎的なデータはかなり多く報告されています。代表的なのは十全大補湯で、がんの発育を遅らせるといふ報告、転移の予防、化学療法、放射線療法の副作用を軽減することが動物実験で証明されています。大切なことは、それらの治療の作用、効果は弱いという点です。実際に臨床でも、35歳の乳がん患者さんでCAF療法(シクロホスファミド+アドリアマ

イシン+5FU)を受けた時に、その副作用で口内炎がひどくて食事が食べられず、痔になって、治療が続けられなくなりました。十全大補湯を飲み始めるとこれらの粘膜障害が抑えられて、治療が継続できるようになり、結果的にがんが縮小し、手術ができました。十全大補湯だけでは抗がん効果は確実ではないが、副作用を抑えることでがん治療をまっとうできることもその大きな役割です」(渡辺助教)

「ここ10年ほど、漢方医学のEBMのレベルアップをしようという気運が高まっています。たとえば、比較試験で効果のあった漢方薬に含まれる構成生薬のどの成分が効いたのかまで突き止められます。ただし、臨床でのEBMではなかなか難しい問題です。まず、証とは科学的にどういふものなのか、解明されていません。また、漢方薬の品質が産地によって違うこと、薬の形態、煎じ方、飲み方などにばらつきがあります。さらに、漢方薬には味、臭いがあり、五感に及ぼす効果も考えられます。比較試験を行う場合、コントロール群用に同じ味と臭いのする

偽薬を作るのがかなり難しい。味と臭いの問題をどうクリアするかも課題です。もうひとつは、漢方医学をきちんと理解している医師が少ない点も課題です」(趙医師)

漢方薬は全身状態の改善、がんに伴うさまざまな症状や手術後の症状の改善、化学療法・放射線療法の副作用軽減に役立つなどの報告が相次いでいる。

## 漢方医学のEBM推進への課題

「食欲がなくなると生きる気力もなくなります。こんな場合に煎じ薬の茯苓四逆湯を用いると食欲が増してくるとともに生きる意欲も出てきます。また、がん告知後の軽いうつ状態には香蘇散などがよく効きます。漢方薬は緩和ケアには欠かせません。がん疼痛ケアチームのカンファレンスを通して、漢方薬を緩和

最近、西洋医学ではエビデンス・ベースド・メディスン(EBM)科学的な根拠に基づく医療の重要性が言われている。漢方医学でのEBMは、どう受けとめられているのだろうか。

漢方医学のEBMの推進には数多くの課題が横たわっているが、がん治療で漢方薬の果たす役割は少しずつわかってきた。「漢方薬が直接、がん細胞を殺すことは証明されていません。免疫を活性化させ、がんの再発を予防することは動物実験と臨床で証明されつつあります」(趙医師)

漢方薬は全身状態の改善、がんに伴うさまざまな症状や手術後の症状の改善、化学療法・放射線療法の副作用軽減に役立つなどの報告が相次いでいる。

漢方治療を受けるときには便通や食欲、睡眠、汗、喉の乾き、頭痛やのぼせ、肩こり、関節の痛みなど、がんとは直接関係のない小さな症状も診断には重要である。問診のときにはできるだけ多くの自覚症状を医師にきちんと伝えることが、自分にピッタリの漢方薬を処方してもらうために重要なのだ。

## がん治療に用いられる漢方薬

- (1) 全身状態の改善に用いられる漢方薬**
  - 補中益気湯…気力・体力の衰えに対する第一選択薬。
  - 十全大補湯…消耗状態が進み、くすんだ顔色、乾燥した皮膚、脱毛、爪が割れるなどの症状。
  - 人参養栄湯…呼吸器、中枢症状がある場合に用いられる。

これら3つの漢方薬はがんの再発予防から末期の全身状態改善まで幅広く用いられる。また、手術や化学療法に伴う免疫低下に対して、治療前の投与で低下を防ぐことができる。これには補中益気湯、十全大補湯が最も使用される。
- (2) がんに伴う種々の症状に用いられる漢方薬**
  - 食欲不振=四君子湯、六君子湯、人参湯、茯苓四逆湯
  - 下痢=真武湯、人参湯、真武湯合人参湯
  - 黄疸=茵陳蒿湯、茵陳五苓散
  - 浮腫=五苓散
  - 疼痛=十全大補湯、桂枝加朮附湯
  - 抑うつ=香蘇散、半夏厚朴湯
- (3) 手術後の症状に用いられる漢方薬**
  - イレウス=大建中湯、小建中湯、大建中湯と小建中湯の合方(中建中湯と呼ぶ)
- (4) 化学療法で起こる種々の症状に用いられる漢方薬**
  - 嘔気=人参湯、小半夏加茯苓湯
  - 脱毛=十全大補湯
  - 白血球減少・貧血=十全大補湯
  - 便秘=大黄甘草湯、潤腸湯、麻子仁丸、桂枝加芍薬大黃湯

(資料=慶應義塾大学医学部東洋医学講座・渡辺賢治助教)